

一般向け人間ドッグの歴史

2015年9月5日
朝日新聞

医療機関における「一般向け人間ドッグ」は日本独自のシステムです。
1950年代半ばから国の成人病(生活習慣病)予防対策を背景に全国に広がりました。

早めの対処で生涯設計の手助けをするもので、効率の良い健康チェックとして活用されています。

1954年7月に国立東京第一病院で「短期間入院特別健康検査」を開始、そのご、聖路加国際病院、東京女子医大でも開始した。大卒公務員の初任給が8700円の時代に6日間の入院で1万2000円。それでも申し込みは殺到したそうです。1958年に一泊二日の人間ドッグが始まりました。

2014年末現在、日本人間ドッグ学会の認定施設だけでも321あり、受診者は約313万人にのぼります。

ただ、高齢化や基準値がより厳しめに設定されるようになったことなどを背景に、すべての検査項目が正常範囲の人の割合は30年前より23%減。2014年で6、6%。

■人間ドッグに関連する流れ

1930年代後半

東京帝国大学(現・東大)附属病院で政治家が健康検査入院

46年 保健同人社設立

51年 死因1位が結核から脳血管疾患に

53年 ライフ・エクステンション倶楽部が会員制の「立会総合精密診断」開始

54年2月 国立東京第一病院で東山魁夷らがテスト健診を受ける

7月 同病院で「短期間入院特別健康検査」開始。その後、聖路加国際病院、昭和医大、東京女子医大でも開始。

9月 読売新聞の記事に「人間ドッグ」の言葉が使われる

57年 厚生省に成人病予防の対策連絡会

58年 1泊2日の人間ドッグ始まる

59年 人間ドッグ学会の前身組織発足

81年 がんが死因のトップに

96年 成人病が「生活習慣病」に

2008年 特定健診・特定保健指導スタート